

# Save Sabah!!

## ～サバ州が救うマレーシアの未来～

普通科人間文科コース マレーシア 人口問題班

久保山詩華 許斐拓人 田村優衣 安村佳菜子 山下優穂

指導教員 古庄大介

### 【目次】

1. 【現状・背景】 ～マレーシアが抱える二つの課題～
2. 【仮説と提案】 ～「CATCHプロジェクト」が導く  
マレーシアとサバ州の明るい将来～
3. 【検証】 ～「CATCHプロジェクト」によって得られる  
メリットとデメリット～
4. 【「提案」を取り入れなかった場合の未来の予測】  
～「CATCHプロジェクト」のない将来～
5. 【結論】 ～マレーシアとサバ州の明るい未来～
6. 【終わりに】 ～真の幸せとは…～

### 1. 【背景・現状】 マレーシアが抱える二つの課題

マレーシアは現在「地域格差」と「食料安全保障」という二つの課題に直面している。私たちはこのことに着目し、二つの課題を結びつけることで両課題を解決する提案を研究してきた。

まずマレーシアが抱える「地域格差」について説明する。

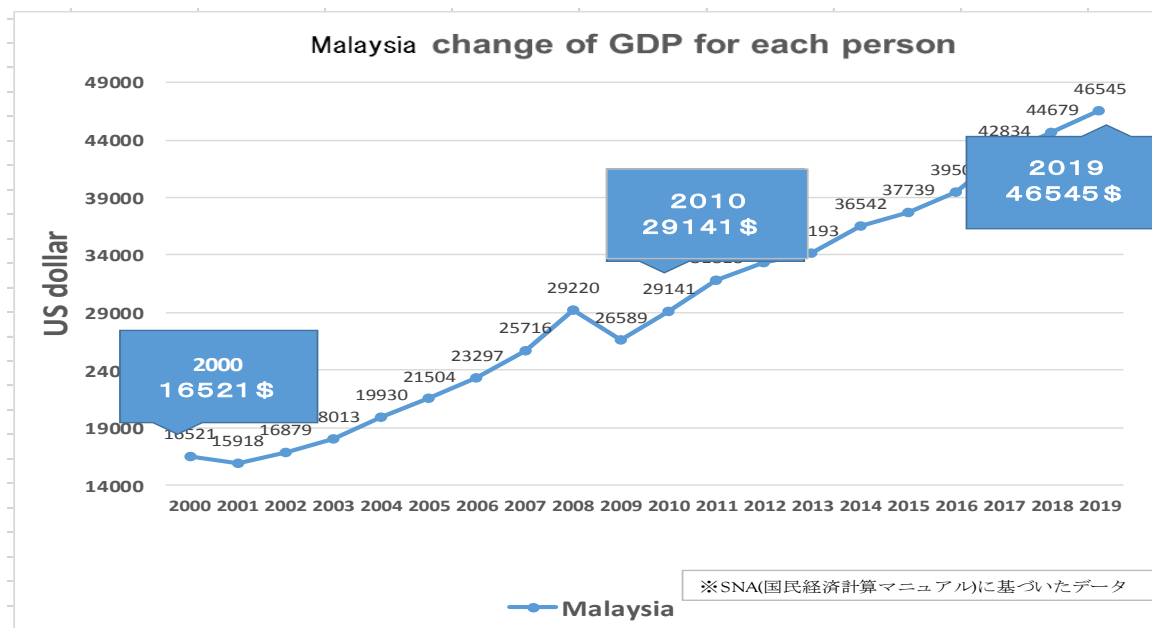


図 1

出典：SNA国民経済計算マニュアル

図1は2000年から2019年までの20年間のマレーシア国民一人当たりの名目GDP数値の推移を表したものである。2000年の数値は16,521USドルであったが、2019年には46,545USドルにまで成長している。この20年間のGDP成長率は、マレーシアは約2.8パーセント、同じ期間での日本のGDP成長率は1.1パーセントであった。これらのことを踏まえると、マレーシアが近年日本を超えるような大きな成長を遂げているということがわかる。

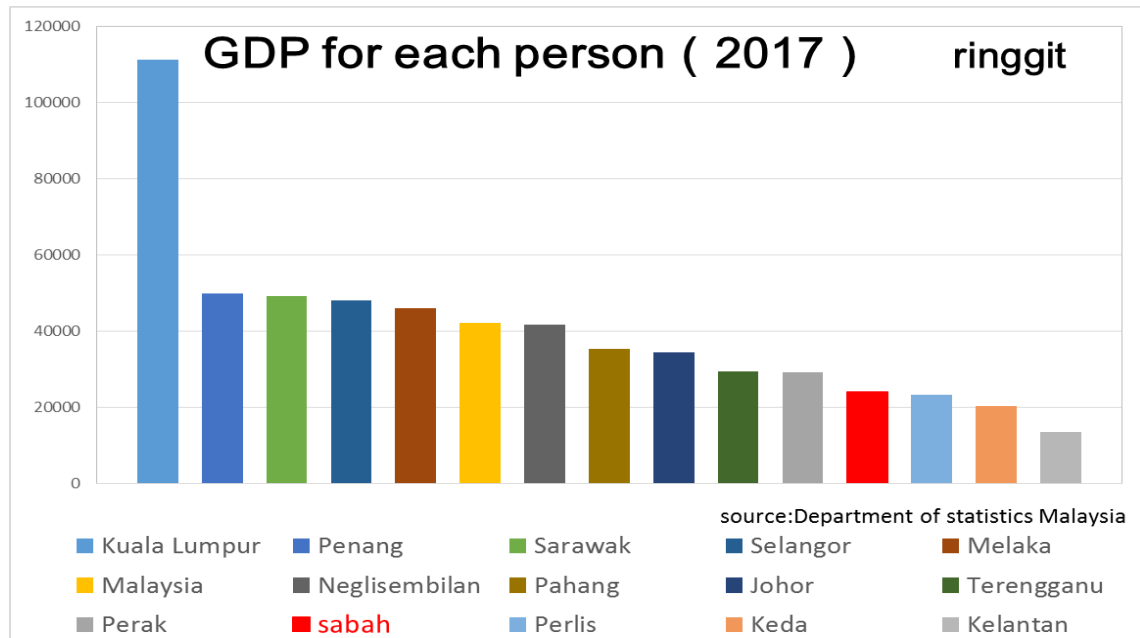


図2 出典：クアラルンプールスタイル ジェトロ

図2はマレーシア全体とマレーシアを構成している14つの州の2017年の一人当たりの名目GDPを比較したものである。マレーシアの首都であるクアラルンプールの数値は極端に突出しており、111,321リンギットとなっている。これに対して最も数値の低いマレーシア半島部東海岸部に位置するクランタン州の数値は13,593リンギットとなっている。マレーシア国内でのGDPで見る地域経済格差は最大で97,728リンギットであり、クアラルンプールのGDPは、クランタン州の約8.2倍にもなる。

図1、図2からマレーシアは国としては大きな成長を見せる反面、地域間で大きな経済格差が生じていることがわかる。

このような地域格差が生まれた原因としてマレーシアの歴史的背景がある。かつてのマレーシアはイギリスからの植民地支配を受けており、その開発の中心となったのはマレー半島西海岸部であった。当時、そこでの主な労働力は中国人、インド人の移民で補われており、マレー人は農村部で専ら農産物に頼って生活をしてきた。このような状況はその後も長く続き、マレー人の経済水準の向上は見込まれないままであった。それが今日の民族間格差の発端となり、地域間格差を伴って現れた。そこで、これを根拠としたマレーシア政府はマレー人を優遇するブミプトラ政策を発案した。雇用政策としてマレー人が農村部に多く居住していることから、マレー人の所得の向上を狙いとして彼らに農村部から都市部への移動を促し、都市部での優先的な雇用機会を与えた。これは、マレー人の経済水準を高め、こ

れまで中華系やインド系の民族が多くを占めていた政府部門・産業部門での労働者の民族別構成比の差（民族格差）矮小化につながった。しかし一方で、農村部のマレー人が都市部へ移動したことで、農村部の労働力の減少に繋がり、結果としてマレーシアの都市部と農村部との地域間格差を助長することとなった。

次にマレーシアが抱える「食料安全保障」について説明する。マレーシアの現在の国内自給率は世界二位という良い傾向にある。しかし、食料自給率の内訳を詳しく見てみると、鶏肉や魚介類の自給率は100パーセントであるのに対し、コメは70パーセント、野菜は66パーセント、果実は40パーセント程度であり、農作物に関しては決して良い数値であるとは言えない。さらに、野菜や果物などの農作物は、未だに中国、シンガポールなどの先進国からの輸入に頼っている傾向がある。この事実について、マレーシア政府はマレーシアのさらなる経済発展のためには、確実に食料を確保し、すべての産業において自給自足を行うことが必須になると述べており、そのためにマレーシアの食品産業を発達させると宣言している。

そこでマレーシアが抱える「地域格差問題」と「食料安全保障」の双方を解決し、マレーシアを豊かな国へと、よりよく発展させていくための提案をしようと考えた。

## 2. 【仮説と提案】 「CATCHプロジェクト」

私たちは半島マレーシアと海を挟んだ場所に位置する東マレーシアのサバ州に着目した。サバ州は2018年時点で人口390万人とマレーシアの14の州の中で第2位の人口の多さであるが、マレーシア国内でのGDP数値は第11位に留まっている。さらに、2018年のGDP成長率は1.5パーセントと14の州の中で最下位であり建設業を除いた主な産業の成長率も低い状況にある。サバ州は州民の所得もあまり高くはなく、マレーシア全体の中での貧困人口の割合もかなり多い。よって、私たちはマレーシアの州の中でもクアラルンプールとサバ州の間の地域格差が最も大きいのではないかと考えた。現在のサバ州では豊かな自然を活かしたプランテーション産業が盛んであり、主軸の産業である天然ゴムやパームオイルなどは需要が高く、マレーシアやサバ州の輸出において重要な役割を担っている。しかし近年、地球温暖化への影響が問題視されており、環境保護の面でプランテーション産業は継続しにくくなっている。そのうえ、限られた資源であるためにプランテーション産業を持続することは難しいと言われている。

また、マレーシアが今後、世界経済の中心へと成長していくためには安定した食料自給率の確保も必要になるだろうと考えた。そこで私たちは、これらの問題を解決するために「CATCHプロジェクト」という独自のプロジェクトを提案する。CATCHのアルファベットにはそれぞれの意味がある。CはCreative（独創的な）、AはAgricultural（農業の）、TはTechnological（技術的な）、CはCooperative（協力的な）、HはHopeful（希望に満ちた）という意味である。この理由に加えて、マレーシアとサバ州の明るい将来をCATCHするという意味も込めた。このプロジェクト名を考えるにあたってサバ州の農業事情や技術、経済事情や産業の成長率など

様々な面からサバ州やマレーシアの現状を見た。そのうえでサバ州の農産物を活かすという独創的なアイデア・農産物の発達・技術の向上・日本との協力的な農業・希望に満ちたサバ州の未来の創造、これら5つのことを柱にこのプロジェクトを考案した。

まず、私たちの提案する「CATCHプロジェクト」で行うことは、サバ州の広大で肥沃な土地を活かして食品産業をサバ州の主な産業にすることである。サバ州はこれまで、天然ゴムやアブラヤシの生産などのプランテーション産業に多くの土地を使用していた。そのため、それらの広大な土地を食品産業の発展のために活用することが可能である。次に、輸入された農産物に頼らず、十分な量を国内で生産するための第一歩としてサバ州の確実な生産体系を確立する。この生産体系を実現することで、マレーシアの食料安全保障を図る。そして農産物の生産で得た利益を利用して、サバ州の人々の所得の向上を図り、生活状況を整えることでサバ州の貧困人口を減少させる。

このプロジェクトでは、日本のような有機農業の技術や栽培方法を取り入れることを計画している。まず現在日本で行われている有機栽培について説明する。有機栽培とは、化学肥料や農薬を使用せず、2年以上経過した健康な土で栽培を行い、遺伝子組換え技術を利用しないことを基本として、環境への負荷を出来る限り低減した農業生産技術を用いて行われる農業のことである。

具体的なサイクルを説明する。

1. 人間が食事をする時に出る残飯などを家畜のエサにする。
2. その糞尿を小動物や微生物が分解して堆肥を作る。
3. その堆肥が入った土から栄養をもらい、農産物が育つ。

という流れである。

また、日本では、有機栽培を行い、有機農産物として認められるには、国で定められたJAS規格という基準を満たさなければならない。

JAS規格とは、農林水産大臣が制定した「日本農林規格」のことで、品位、成分、性質などの品質に関係する基準、生産方法に関する基準が定められています。このJAS規格を満たし検査に合格すると、有機JASマークをつけることができる。

次に流通システムについて説明する。まず生産者が出荷団体や集荷業者に育てた農作物を出荷する。そこから卸売業者に出荷されたり、生産者から卸売業者に直接出荷されたりすることもある。そして、卸売市場でせり売りや相対売りなどで売買され、仲卸業者や売買参加者→買出人・売買参加者→消費者 という流れで農作物は動いていく。

国際的な取り組みとしてグローバルGAPというものがある。

グローバルGAPとは、農業において環境、経済、社会的持続性があり、安全で品質の良い食及び食以外の農作物を生産するための取り組みのことである。そのGAP認証制度をマレーシアで行ったものがMyGAPと呼ばれるものである。MyGAPとはSALM（農業実践体系）、SALT（畜産実践体系）、SPLAM（漁業実践体系）という3つの取り組み認証制度がまとまったGAP認証制度であり、有効期間は2年と定められている。

認証基準は日本にあるGAP認証制度よりも比較的取得しやすいが、認証取得のための監

査や書類手続きといった事務作業に負担が大きいため、2013年時点でMyGAPの取得農場はマレーシア国内で636、野菜農場のたった2%しか取得出来ていないという現状がある。現在マレーシアでは、有機農業を実践する農業・畜産・養殖部門を組み合わせたマレーシア農業者による「MyOrganic」という有機認証制度がある。

これは、2015年から始まった制度で、日本と同様にマレーシアの農林水産省が設定した基準を満たした農場にだけ「MyOrganic認定」という認定が与えられる。2014年にマレーシアの法的機関であるMARDIはマレーシアの有機農家による技術の適用度を調査するためにマレーシア・インドネシア・日本の農家の有機技術を比較した。この調査でマレーシアの有機農家における技術の適用度は日本やインドネシアの農家に比べて緩やかであることがわかった。日本は土の上にビニールを張って虫の侵入を防ぐマンチングという技術と肥料の散布に重点を置き、比較的量よりも高品質な作物を作ることが求めているが、それに対してマレーシアは農業の生産性に影響を与える可能性のある害虫および疾病制御技術の適用よりも緩衝帯を設置して効率的に作物を作ることが優先させていることが分かった。

マレーシアにおいて有機農業という生産方法は、日本よりも発達していない。しかしその一方で2010年のマレーシアの法的機関であるMARDIは、その研究においてマレーシアの消費者の90パーセント以上がオーガニック製品を知っており、53.8パーセントの人が6か月に1回以上オーガニック製品を消費していることを明らかにした。この研究結果を見てわかるように、マレーシア国内での消費者のオーガニック製品に対する関心は高まっており、マレーシアでの有機農業の推進には需要があると考えた。

まず有機農業をサバ州で行うために、品位・成分・性質など有機農産物の「品質に関する基準」と「生産方法に関する基準」を定める。環境への負荷をできる限り減らした管理方法で栽培することや、堆肥等で土づくりを行い2年間は化学的肥料及び農薬を使用していない土地を作ること、その後も生産の過程で化学的肥料及び農薬を使用しないこと、遺伝子組み換え技術を使用しないことなどを原則とする。また、安全に作られた農産物であるかの検査や土の安全性・有害性の調査を行う。そして、基準を満たした農産物や農場には認証を与え、他の商品やブランドと区別し消費者の方々が安心して手に取ることができるような工夫を行う。また、今現在でも現地の農園では農産物の適切な栽培方法や環境の管理方法、また化学的肥料及び農薬の人体への害についてあまり多くの知識を持っていない労働者が働いている。そのため、農場の経営者が化学的肥料や農薬を使って農作物を作っていることが原因で、その農園で働く労働者の身体に異常が発生したとしても、知識がないために異常が発生した原因を知ることなくそのまま働き続ける、ということが起こるかもしれない。そのような状況を改善するために、労働者を対象にした技術や知識指導を定期的に行うこととした。

このように、働く人々の環境から良いものに変えていくことが重要であり、これらの取り組みは農産物の長期持続に繋がっていくだろうと私たちは考えた。

そして、サバ州はクアラルンプールやマラッカなどの発展している都市が多数存在して

いる半島部から海を挟んで約1600キロメートル離れているため、船やトラックを用いたとしても作物を収穫してから輸送をするまでに、約三日間を要すると予想される。マレーシア政府は主要な輸出品になり得ることができるために重点を置く作物として、ザボン、ドリアン、ココナッツ、キャベツ、パイナップル、キノコ、コーヒー、天然ゴム、ハチミツ、パディを挙げているが、私たちの提案ではサバ州からクアラルンプールやマラッカなどの都市部までの距離を考慮して、中でも比較的劣化の遅い作物を栽培する。具体的にはドリアン、ココナッツ、パイナップル、コーヒー、ハチミツ、パディなどの6種類を栽培することとする。

### 3. 【検証】 「CATCHプロジェクト」によって得られるメリットとデメリット

「CATCHプロジェクト」で得られるメリットは二つある。一つ目のメリットは、労働・物流・輸送・マーケティングの4点で働き口が増加することである。現在のサバ州を含むマレーシア全体の平均年齢は28.3歳と若い世代の人々が多い。しかし、その現状に対し、地方には若い世代の需要を満たすほどの魅力的な職業は少ない。「CATCHプロジェクト」で行う有機農業は、マレーシア国内でもこれまで見られなかった新しい取り組みであり、将来性という観点からみても大きな期待が見込めるものであると考える。

このように魅力的な「CATCHプロジェクト」を行うことで、サバ州が食品産業で栄えることができれば、仕事を求めている若者の都市部への流出の防止につながる。これが二つ目のメリットとしてあげられる。そのうえ、有機農産物の普及により健康志向が高まっているマレーシアの人々のニーズに合った暮らしを提供することができる。

一方でデメリットもいくつかある。一つ目のデメリットは「CATCHプロジェクト」は即効性に欠けるという点である。このプロジェクトは、有機農業を行うための土壌の整備から始まる。これには最短で二年間かかる。さらに、労働者の有機農業の技術養成や農作物が安定して収穫できるようになるまでの期間を考慮すると、サバ州の人々の収入向上や、マレーシアの食料安全確保の実現などの結果を得るまでには長期間の取り組みが必要となる。もう一つのデメリットは資金の問題である。取り組みに長期間を要するという事は、同じく多額の資金を必要とする。もし「CATCHプロジェクト」がマレーシア政府に採用された場合、マレーシア政府より予算が下りる。しかしどの程度予算が下りるのかを把握することは難しいため、不足分をどう補うかが課題となる。この課題を解決するための一つの案としては、クラウドファンディングによる資金収集を考えている。リターン（見返り品）にはサバ州の有機農業で栽培した有機農作物を予定している。

### 4. 【「提案」を取り入れなかった場合の未来の予測】

「CATCHプロジェクト」のない将来

現在のサバ州の主な産業である天然ゴムやパーム油のプランテーション産業は持続可能性における課題があるため継続が不可能であると予想されている。継続することが困難となった場合、主産業を失ったサバ州の経済は停滞し、人々の収入や生活の水準の向上は見込

めない。そして、サバ州は新たな産業を見出すことができず、ますます都市部との経済格差が広がることが懸念される。

また、地域格差や貧困問題を解決することができず、サバ州の治安は悪化し、今後の将来的な発展は見込めないだろう。

そのうえマレーシアの食品産業は発展せず、政府の目指す食料安全保障は実現しない。結果的に、世界経済で戦い抜くことができずにマレーシア全体の経済もまた停滞する可能性が発生することとなる。

## 5. 【結論】 マレーシアとサバ州の明るい未来

私たちが考えたこの「CATCHプロジェクト」を実行すると、第一にサバ州の人々の所得が向上し、貧困人口が減少する。貧困人口が減少することで人々の生活にも余裕が生まれ、このプロジェクトの実行を考える上で懸念されていたサバ州の治安の悪さの改善が見込める。また、サバ州での安定した食料の生産を確立することで、マレーシア全体の食料安全保障が実現する。マレーシアの年々増え続ける人口に対応できる十分な食料の生産が可能となることはマレーシアにとって大きなメリットになるだろう。そしてその生産の重要な中心地にサバ州がなることで、サバ州の将来の安定した発展の継続が見込める。

また、この「CATCHプロジェクト」を通して、地域の特性を活かした産業が広まれば、マレーシア国内での地域格差を矮小化することができる。

## 6. 【終わりに】 真の幸せとは…

これまで私たちはサバ州の貧困人口について、少しでも減少させることが出来ればという思いで研究してきた。今回の研究ではサバ州の貧困を課題として見なしている。しかし、現地の方が現在の生活に満ち足りており、さらなる変化を望んでいない場合、「CATCHプロジェクト」は現地の人々にとって必要のないものとなる。幸せの価値観は、生まれた地域の文化や習慣によって一人ひとり異なっている。だからこそ、「CATCHプロジェクト」の導入において最も重要なことは、柔軟性であると私たちは考える。マレーシアやサバ州の現地の人々の意見を尊重しながら、慎重に「CATCHプロジェクト」を実行に移していきたい。

## 7. 参考文献・引用文献

・『世界経済のネタ帳』

[https://ecodb.net/country/MY/imf\\_gdp2.html](https://ecodb.net/country/MY/imf_gdp2.html)

・『クアラルンプールスタイル』 日本貿易振興機構（ジェトロ）

<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2019/02/5c514de494e8daec.html>

・『クアラルンプールスタイル』 ジェトロ PDF

[https://www.jetro.go.jp/ext\\_images/\\_Reports/02/2019/5c514de494e8daec/1.pdf](https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2019/5c514de494e8daec/1.pdf)

・『2010年から2019年までのマレーシアのサバ州の総人口』  
<https://www.statista.com/statistics/1041494/total-population-sabah-malaysia/>

・『マレーシア統計局公式サイト』  
[https://www.dosm.gov.my/v1/index.php?r=column/cone&menu\\_id=dTZ0K2o4YXgrSDRtaEJyVmZ1R2h5dz09](https://www.dosm.gov.my/v1/index.php?r=column/cone&menu_id=dTZ0K2o4YXgrSDRtaEJyVmZ1R2h5dz09)

・『CITY POPULATION』  
[https://www.citypopulation.de/en/malaysia/admin/12\\_\\_sabah/](https://www.citypopulation.de/en/malaysia/admin/12__sabah/)

・『Malaysia GDP 1960-2018 Data』  
<https://tradingeconomics.com/malaysia/gdp>

・『マレーシアの一人当たりGDP』（2019）  
<https://www.ceicdata.com/en/indicator/malaysia/gdp-per-capita>

・『マレーシア統計局』（2019年）  
[https://www.dosm.gov.my/v1/index.php?r=column/cthemedByCat&cat=102&bul\\_id=a0c3UGM3MzRHK1N1WGU5T3pQNTB3Zz09&menu\\_id=TE5CRUZCblh4ZTZMODZlBmk2aWRRQT09](https://www.dosm.gov.my/v1/index.php?r=column/cthemedByCat&cat=102&bul_id=a0c3UGM3MzRHK1N1WGU5T3pQNTB3Zz09&menu_id=TE5CRUZCblh4ZTZMODZlBmk2aWRRQT09)

・『グローバルノート』 国際統計・国別統計専門サイト（2018）  
<https://www.globalnote.jp/post-1409.html>

・『マレーシア農林水産省 公式サイト』  
<http://www.doa.gov.my/index.php/pages/view/377>

・『日本 農林水産省』  
[https://www.maff.go.jp/j/jas/jas\\_kikaku/yuuki.html](https://www.maff.go.jp/j/jas/jas_kikaku/yuuki.html)

・『The Star』  
<https://www.thestar.com.my/news/nation/2019/11/05/sabah-launches-10-year-blueprint-to-boost-agriculture-sector-food-security>

・『FMT news』  
<https://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2019/11/05/sabah-launches-agriculture-blueprint-to-boost-gdp-jobs-and-income/>

・『MEMORVA』 GDPと1人当たりGNIのランキング・国別順位（2017年）  
[https://memorva.jp/ranking/world/gdp\\_gni.php](https://memorva.jp/ranking/world/gdp_gni.php)

・『マレーシアの地域格差是正政策と産業立地政策・産業立地動向』  
<http://www.regionalplanning.net/seta/ddd/chapter5.pdf>